

栄光

『御国目指して』

説教
創世記12章1節〜2節
フィリピの信徒への手紙3章7節〜21節

岸 俊彦

説教・「御国目指して」岸俊彦牧師……1
特集・イースターに思う……2
説教・「生きた水をください」菊地信行教師…4
懇談会報告……5
菊地信行教師 大澤みずき牧師
説教・「時は来ている」大澤みずき牧師…6
転会おめでとう…7
林弥寿恵姉 長老のファイル…7
牧師の書齋から…8

高校生の頃から読み出した森有正は、アブラハムの生涯に触れ「内的促し」という言葉をよく使いました。私にとつて「内的促し」とは細き神の声です。神による召命です。アブラハムもパウロも主に捕らえられた生涯でした。

私たちの生き方は、アブラハムやパウロほど劇的でもなければ、衝撃的でもありません。もちろん、私たちの人生にも、毎日の生活にもアップダウンがあります。しかし、一直線に毎日の生活が進んでいくわけではなく、行きつ戻りつしているのが実情です。

実は、彼らも私たちと同じです。御国目指して一直線ではありませんでした。「患難は忍耐を、忍耐は鍊達を、鍊達は希望を生む」と語

った(ロマ5・3、4)パウロの生涯を見れば分かります。「弱さを誇る」(Ⅱコリント12・9)と語ったことから分かります。自らの弱さを認め、そこに働く主の恵みを知られました。同じようにキリストの恵みによって(ロマ5・6〜8)主にある兄弟姉妹の群れである教会に、パウロは一人加えられました。兄弟姉妹が祈りに覚え支えている、このことにパウロは気づかされました。キリストと共に生き、兄弟姉妹と共に、またキリストが結んでくださる隣人と共にパウロは生かされていきました。パウロが新たに経験したことは、主にあつて共に喜び、共に泣く生き方でした(ローマ12・15)。

42年間の牧師生活、家族も含め

て、狭い教会の世界ですから色々なことがありました。コップの中の嵐もありました。まことに「井の中の蛙大海を知らず」そのような日々でした。しかし、皆さんとの教会生活は、「キリストはその兄弟姉妹のためにも死んでくださった」(ロマ14・15)ことを、その都度思い起こさせられた日々でした。やや正確に言うと「キリストは私のためにも死んでくださった」。もう少し言うと「キリストは私たちのためにも死んでくださった」。主なる神の恵み、天の高きを知り日々でした。さらに言わなければなりません。いと高きより、低きこの世界に、私たちのもとにまで降ってくださったキリストの恵みを、良いことも悪いことも、苦し

いことも悲しいことも嬉しいことも含めて、キリストの恵みを味わうことのできた日々でした。正直なところ、「私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに私はすべてを失いましたが、それらを今は屑と考えています」(フィリピ3・8)とは言えませ

ん。42年間の牧師生活を感謝しながらも、自らに向かって「恥を知れ」と言うところです。しかし、このような私を、このような私たちを、「キリストは、万物を支配下に置くこととさえてできる力によって、私たちの卑しい体を、ご自身の栄光の体と同じ形に変えてくださったのです」(3・21)。主を信じ、お互いのことを覚え祈りながら、後ろのものを忘れ、御国目指して共に進みました。

18世紀ニューイングランドの牧師、神学者だったジョン・エドワーズは、教会の有力者と対立して解任された時、最後の説教で、静かに、いつもと変わらない口調で、細やかな配慮をもって主の慰めの言葉を語りました。怨恨や責めることの全くない説教は、終わりの日、この地上で対立した一人ひとりとの御国での主にある再会を願った祈りで結ばれました(森本あんり)。エドワーズは、キリストの恵みによる和解の実現を信じて祈り、祝福しました。

私も、終わりの日、御国で主にある再会を信じて、最後の説教としたいと思います。(3月30日)

イースター に思う

イエス様の十字架の苦しみを思い起こす受難節を経て
4月20日にイースターを迎えます。
イースターに向けての思いを書かせていただきました。



イースター

岡田 基

「インマヌエル会」をご存知でしょうか。毎月原則第4土曜日の午後、教会で開かれている読書会で、現在はカール・バルト著『教義学要綱』をテキストに使徒信条を学んでいます。3月は偶然ですがイースターに相応しい「18章三日目に死人のうちよりよみがえり」を読んで、皆で話し合いました。

「…十字架につけられ、死にて葬られ…、三日目に死人のうちよりよみがえり、天にのぼり…」

毎週主日礼拝で自らの信仰を告白している使徒信条の一節です。世の中では、華やかなクリスマスに比べてイースターはどちらかというと地味で、あまり話題に挙がらない傾向がありますが、主イエスの復活というキリスト教の根源を成す重要な出来事を祝う行事であることは、周知の通りです。

「主イエスは復活されたのだ」

という復活信仰によって私たちも復活の主に倣って将来における復活を保証されていると信じることは最大の喜びであり、決して無茶な信仰ではないと思います。

私は今年卒寿を迎えますが、人間は例外なく老いと死を迎えます。「死よ、私はお前の死となろう」（ホセア13章14節）と老齢が私たちに迫ることを神はお許しになったのです。イザヤ書40章は老いと死について語っていますが、8節で「草は枯れ、花はしほむが、神の言葉はとこしえに立つ」と、どんなに老いても最後には決して滅びることがない神の言葉を教えてください。

空になったお墓によって、復活の出来事が明らかにされる様子を、ヨハネ福音書は20章8節で、空のお墓を自分の目で見て初めて主の復活を信じた弟子たちの様子として述べていますが、弱い信仰者であるこの私が執るであろう行動と、この時の弟子たちの振る舞いがあまりにも似ているので、弟子たちがとても身近な存在となつて、微笑ましくさえ思っています。

覚悟のイースターエッグ

石室優子

母のお腹の中にいる時から通ってきた教会。だが大学生の頃、むさばるように通いたい踊りのレッスンに出会い、それは日曜の朝にあった。最初は苦しい思いで主日礼拝もCS教師の奉仕も休み始めた。そして完全に教会から離れていった。

気づけば日曜労働こそが当たり前な踊りの仕事に就き、結果として20年近くの時が経っていた。その間、経堂北教会で祖父、小倉正大の葬儀があった。CSで一緒に育ってきた同年代の仲間たちが葬儀の手助けをしてくれていた。その姿がまぶしかった。主に仕えているのだと思った。

時がだいぶ経ち、次に祖母、重藤千代子の葬儀があった。祖母の葬儀をきっかけに、年に数回ある第5日曜日だけ仕事を休んで礼拝出席を始めた。教会に再び通い始めて3年が経ったイースター前

に、私は日曜日の仕事を辞めた。一番の稼ぎどころなので不安はあった。日曜日に教えている踊りの生徒たちの円陣のなかで、教会に通いたいのです、という話を丁寧にした。

そして自分のためにイースターエッグを作った。まるで幼いCS生徒さながらに集中して作った。卵の中味を取り出して洗い、綺麗な飾りを貼っていった。不器用な自分にしては会心の出来だった。勢いが止まらず、もう一つ出来た。教会に持つていって、一番最初にイースターの挨拶をした人にそれをあげた。その後結婚する幼馴染の石室裕一に。大の男に可愛いイースターエッグは全くもっていらなかっただろうし、夫は子どもの頃から工作の達人だ。よくあげる勇気が出たものだ。

ごく最近、古びて汚れたその卵をついに捨てた。再び教会生活を送る覚悟の象徴のようなものだったが、もう無くても大丈夫な気がした。ちなみに夫が持っていた方の卵だ。自分の卵は不注意でとうに割ってしまった。

受難節に平和を思う

酒井由紀子

受難節は、イエス様が私たちのために十字架の苦難を受けたことを思い、黙想して過ごす時だ。しかし、私の職場では年度末の繁忙期で、異動や子供の進学も重なり、慌ただしく心がざわつく時期だ。

神様に心を向け黙想するこの時だが、今辛いことが多い。国内では各地で山火事が起き、地震による被害は癒えていない。ロシアのウクライナ侵攻は停戦交渉が進まず、イスラエルとハマスの紛争は停戦が崩壊して、今も多くの民間人が殺されている。神様を信じているはずの政治家の思惑で戦争が行われているなか、安穩と暮らし、何も出来ない無力な自分に空しくなる。

昨年、ガザの詩人・大学教授で爆撃により亡くなったリファト・アルアライールの詩を読み、胸を締め付けられた。

「わたしが 死ななければなら

ないのなら あなたは、生きなくてはならない わたしの物語を語り わたしの持ち物売り ひと切れの布と 糸をすこし買って」

風を作つてと詩人は続ける。

「もし、わたしが死ななければならぬなら 希望となれ 尾の長い 物語となれ」

彼は長年言葉による抵抗を掲げて活動し、若い作家たちの精神的支柱だったそうだ。彼の死により世界中にこの詩が拡散され、50以上の言語に翻訳された。

先日は朝日新聞のガザ通信員マンスール氏が亡くなった。生き延びることで必死な中で発信を続ける「世界を信じられない」「それでも、私は言葉を書き、写真を撮り続けるしかない」と記していた。

戦争という暴力の中でも言葉を奪うことは出来ないし、その言葉を聞く者は必ずいる。イエス様の十字架での受難も、その様子を見た者が人々に語り伝え、書き記したことにより、現代の私たちも御言葉を聞くことができる。

私はただ祈り、少しばかりの支援をすることしかできないが、諦めずに平和を求めていきたい。

説 教

『生きた水をください』

ヨハネによる福音書4章7節〜15節

聖学院小学校チャプレン 菊地信行

教会では時々、飢えや渇きという言葉を使って、その人の心や信仰の状態を表すことがあります。主イエスは喉を潤すための水を求めて、サマリアの女に声をかけました。けれども、言葉を交わしていくうちに、主はその女性を感じている、別の渇きについて言及するように話を進めていきます。

サマリア人とは、ここでも言われているように、ユダヤ人が交際しない民族として見なすという一種の差別を受けていました。そして、この女性は同じサマリア人からも良く思われていないという事情を抱えています。この女性が水を汲みに来た正午ごろというのは、当時人々が起きて生活する時間帯ではありませんでした。それでもお昼に水を汲みに来たというのは、人目を避けてわざわざその時間帯を選んで来ていたということです。ここに女性が受けていた

差別の激しき、孤独の深さが表れています。そうした交わりの少なさを、主はここで渇きと言われているのです。それもこの女性に欠けていた交わりとは、共に語らい食卓を囲む友や家族との親しい交わりであると言われています。9節の後半で「ユダヤ人はサマリア人とは交際しなかった」という一文が出てきました。ここで交際しなかったと訳されている言葉は、「容器を共有しない」とも訳すことができます。この出来事に当てはめて言えば、サマリア人とユダヤ人は水を汲む物を一緒に使わない、あるいは水を飲むための杯を一緒に使わないという意味になります。このことから思い起こされるのが、主の晩餐の出来事です。

この時、主イエスは弟子たちと一つの杯からぶどう酒を飲みました。これはイエス・キリストと弟子たちの関係性の深さ、交わりの

豊かさを示しています。そして、その時と同じくらい親しい交わりを、主が自らサマリアの女に求めておられたのです。主は水が欲しくて女性に声をかけたのではありませんでした。主が求めたのは豊かで親しい交わりであり、この交わりを通して主にある慰めと励ましを味わって欲しいと願っていたのです。

しかし、イエスさまの憐れみと施しを素直に受けようとしない女性の姿が、ここでは描かれています。汲む物もなければ井戸も深いの、どうやってその生きた水を手に入れることができるのかと、主に問いかけます。少し投げやりにも見える態度には、女性の諦めが表されているように思います。そんな女性に対して、主イエスは交わりから生まれる希望をここで示そうとされたのです。ここに表されている諦めや絶望は私たちを罪や過ちに向かわせようとしています。また、罪だと分かっているも離れられずにいる苦しきやもどかしさは、私たちにも覚えがあるはずで、それでも主は罪ある者に、渇くことのない生きた水を注

ぎ出してくださるのです。ここに主の深い慰めが示されています。私たちは自分の罪深さを知っているからこそ、神の愛の深さを知ることができません。この罪深さというのは、自分自身に対する絶望の深さと言っても良いかもしれませぬ。どうせ自分が良い人になれないことなどないのだから、努力や期待をするだけ無駄だと決めつけてしまうことの多い私たちです。それはサマリアの女も同じだったと思います。それでも、イエス・キリストは彼女のことでも私たちのことも諦めないでいてくださいます。諦めることなく、私たちのことを呼び止め、何度でも交わりに招いてくださるのです。その憐れみに支えられて、私たちも「生きた水をください」と祈り求めます。この水は、自分の飲む分だけあればそれで良いということではありません。大切なことは、教会全体がこの地につくられた命の水の泉となることです。この生きた水を求めて教会に来る者が新しく起こされますように。そう願いを込めて共に「生きた水をください」と祈りを合わせたいと思います。

菊地信行教師との懇談会報告

1月の第4主日礼拝は菊地信行先生をお招きし、礼拝後に懇談会の時を与えられました。以前、神学生として経堂北教会にいらした先生は、2022年4月に伝道師として西千葉教会に着任されました。

学生時代は黒人文学に興味をもたれ、英語の教師を志した先生が、聖学院での実習時に、聖書の話を生徒にしたことで喜びに変えられ、献身の道へと結びつき、2018年4月に東京神学大学に3年次編入された経緯や、西千葉教会での働きについてのお話を伺うことができました。

西千葉教会は創立120周年の歴史ある教会で、経堂北教会よりも教会員数、礼拝出席者数も多く、主日礼拝には120〜150人ほどが出席されているそうです。その他にも主日夕礼拝、聖書研究・祈禱会、学びの場や教会学校、8つの地区での家庭集会などがあり、そうした中で正教師試験を受けられるなど、多忙な日々を過ごされました。

正教師となり、副教師としてお

働きになっていた先生ですが、この4月から聖学院小学校チャプレンとして赴任されました。

召命を受けた当初は教務教師として子どもたち、中高生への伝道を考えておられた先生が思いがけず伝道師になられ、今度は副教師としてこれからも働こうと考えていたところ、また思いがけずチャプレンにと、神様の御心は本当に計り知れないものです。

証の中で、「自分が用いられたことよって、受洗に導かれた生徒がいたことから神様の働きに確信が持てました」と話された先生の言葉が印象深く残りました。

教会から学校へと御言葉を伝える場は変わりますが、菊地先生を通して神様に触れる子どもたちの未来と、先生の新天地でのお働きをお祈りいたします。

質疑応答では、牧師交代に関する先生のお考えや、教会学校、青年会の活動、また、新来会者へのアプローチについてなど活発な意見交換もなされ、豊かな交わりの時を与えられ、感謝いたします。

(門田浩一郎)

大澤みずき牧師との懇談会報告

昨年11月24日の大澤正芳牧師の説教から3ヶ月、2月23日にはご夫人で栗平教会の出席教師である大澤みずき先生がお見えになり、ご奉仕くださいました。

礼拝説教はローマの信徒への手紙13・11〜14より「時は来ている」と題して、キリストを着る私たちが日常を送る中でどう「時」と向き合い意識して過ごすか、品位を持つた生き方をするにはどうすればよいのか、力強く丁寧にお話しくださいました。

聖書よって襟を正して過ごすこともがけはもがくほど、辛く厳しい暗闇は私たちを引きずり込みます。そんな暗闇を生きる時、またそう感じ、下を向いてしまふ時、眠りから覚めた時、キリストの再臨にどう向き合うのか問われています。その私たちに「希望に向かつて明るく生きよ、光の武具を身につけよ」と語る大澤みずき先生は3人のお子さんのお母さんでもあり、優しくそして芯の強さを感じるお人柄でした。礼拝後の懇談会も私たちが温かく包んでくださ

るひとときとなりました。暮らしの中にキリストがあり、栗平教会で過ごされている大澤みずき先生は、教会員の皆さんにもきつと慕われ愛されていらつしやるのだから、と感じました。そしてその強さは鎌倉雪ノ下教会や7年間ご奉仕された金沢元町教会など、歴史ある教会の牧会で身につけられた賜物でもあります。

育児との両立は、数々のご苦労もあつたことと思います。もつと掘り下げてお話しを伺えば良かったと、司会の至らなさに申し訳なく思うと共に、いやいやまだお会いする機会はあると思ひ直し、これからも経堂北教会は兄弟姉妹の教会として栗平教会との交わりを続け、大澤みずき先生ご家族の皆様のご幸せと豊かな牧会を祈り続けたいと思います。

あの時辛そうだった腰の痛みは良くなりましたでしょうか。どうか無理をなさらずお身体を大切に、また良い交わりの時が持てますように感謝をもってお祈りいたします。

(牧内美和)

『時は来ている』

説 教

詩編23編

ローマの信徒への手紙13章11節～14節

大澤みずき

今日聞きましたみ言葉は、信仰者は、「今がどんな時であるかを」

知り、弁えることが大切だと言います。時計が刻む時ではなく、ある一点の時を指します。例えば、「その時、歴史は動いた」というような決定的な時を指しています。この時が分かれれば、おのずと12節以下に記された、品位を持った生き方が私たちのものになります。

しかし、私たちは、この時を知るといふことを見落としてしまふことがあるかもしれません。私たちは、時に注意を払わずに、13節のような信仰者としての姿や生き方を聖書から示されると、すぐに聖書の言うことを実行しようとすることがあります。

主に従うつもりが、いつのまにか、行いが自分の主人になっている現実につながります。しかも、自分は品位を持って生きたいと願っている、必ずしも同じ思いの

人ばかりではありません。流され、影響され、努力は挫折します。

けれども、時に注意しないままでは、必ず疲れて、私は罪人だからと開き直りに生きる他なくなるのです。そこでこそ、パウロが今がどんな時か思い起こすようにと語る言葉に耳を傾けなければなりません。それはどんな時か？

パウロはまず今の時を、夜更けだと言います。私たちに違和感はないと思います。遠い国で繰り返される戦争だけでなく、私たちのごく身近なところでも争いや妬みは絶えません。信仰者が弁える時は、暗闇に目を閉ざすのではなく、この世の人々が見るよりも厳しくその暗闇を弁えるのです。

それにも関わらず、同時にキリスト者には知らされているもう一つの時があるとパウロが語っていることもまた弁えるのです。それは、日は近づいているということ

です。闇がどんなに深くても、絶望しか見いだせない闇ではなく、希望が宿っていることを弁えるのです。パウロが告げる昼とは、終わりの日、キリストが再びこの世界に来てくださる時です。

ある説教者は、夜更けというのは、「夜がしんとふけていき、真暗闇がもうそれ以上は進みようもない最後の瞬間が来た」という意味だと言いました。しかし、キリスト者は、このような時の中に日の近づきをしっかりと弁えて、この闇と真つ向から戦うことが求められています。パウロが「光の武器を身に着けましょう」と言ったのはその戦いのためです。

深まる闇のすぐそばに近づいている不思議な日の近づきという神の時を知ると、今なすべきことは明らかになってきます。辺りはなお暗くても、まずしっかりと目を覚まします。目を覚まして、品位を持ってキリストを身に着けて歩むのです。

私たちと共におられるキリストの姿がはつきりと見える時、闇の行いを選ぶことはもうできないと言います。私たちは戦いに相応

しい武器をとります。やがて誰の目にもわかる姿で来られるキリストは既に来られたのです。やがて来られるこのお方は、既に来られたインマヌエルなるお方です。パウロはこの主イエス・キリストを身に着けよと言います。キリストを着るとは、キリストと全く一体にならせていただくことです。インマヌエルなる主に一体となっていただけで、主に従う生活を整えていただくのです。

最後に、パウロは、「欲望を満足させようとして、肉に心を向けてはなりません。」と勧めます。どうしてそうするか。それは、詩編23編にあるように、神様がどこまでも私たちの世話を引き受けてくださるお方だからです。生きる時も、地上の死を迎える厳しい時にも、決して見放すことなく、世話をしてくださるお方だからです。信仰者にとって真の自分とは、このように慈しみ深い主人であるキリストと離れたところにはありません。だから、神に従う生き方以外はないのです。これが私たちの本當の欲求です。そこに私たちの喜びの生き方がつくられます。

転会おめでとっ!

ただいま

林 弥寿恵

転会式の後、岸先生が「ご挨拶

を」とおっしゃり、とても緊張しました。ご挨拶の言葉を全く用意しておりませんでしたので。何となく怠け者でしょう。でも「この言葉だ、私の思いは。岸先生、そして皆様に伝わるのでは」と思いました。それは「ただいま」です。転会式の後、岸先生が「ご挨拶を」とおっしゃって、思い切った「ただいま」とお伝えしました。快く迎えてくださった岸先生、皆様に感謝申し上げます。

私は初等科から大学卒業までカトリックの学校で過ごしました。大学一年の時に、夫・信明と出会った。間もなく村田の家族、林の母と顔を合わせ、なんて素敵な温かい家族でしょう、と嬉しかったことです。その後、私の家族に紹

介し、私は姉妹4人でしたので、両親は息子ができた大喜びでした。私の姉妹も大歓迎で、こんなに嬉しいことはありません。姉2人はもう天国に行ってしまいました。信明が天国に行き喜んでいいことだと思います。寂しくなりましたが、最愛の征吾、玲美、妹に支えられ、幸せなことでございます。

しばらくの間、渋谷のカトリック教会に日曜日に通っており、同級生と同じ時間を過ごしました。信明が歩けなくなりました時は教会の友人が信明を車に乗せ、温泉に連れて行ってくださいました。夫を抱えお風呂に入れてくださりとても心強く、温かい友人たちに感謝でした。その後も会社の方々が良い温泉があると、私たちを連れて行ってくださいました。

林の母、叔父叔母の村田望・徳子より先に逝ってしまいました。天国はにぎやかですね。望叔父、徳子叔母、愛子ママ、これからも私たちを見守ってくださいませね。私はたくさんの思い出とともに、北教会に帰ってまいりました。どうぞ、これからもよろしくお願いたします。ただいま。

長老のファイル

岸先生退任までの最後の1ヶ月、教会員それぞれが色々なことを噛み締めながら過ごしたのではないのでしょうか。特に2月、3月に受洗・信仰告白をされた3人の兄弟姉妹は、主を信じる気持ちで、長い時間お世話になった岸先生の前で、口に出して告白したいと勇気を出されたことでしょうか。3人が群れに加わったことはとても嬉しく、心強いことです。

新年度からの教会生活、信仰生活がどのように変わるのかを思う時、不思議と不安は少ないです。そのために心づもりを重ねてきたのです。しかし困ることは必ずあるでしょう。松谷先生と共に、試行錯誤で乗り越えていきたいです。

年度末をもって岡田みな子姉が、長い間続けてこられたオルガン奏者のご奉仕を退かれました。みな子姉の、勇気を奮い立たせてくださるような凛とした音色が大好きです。本当にありがとうございます。

今年も、教会の働きを皆で担うべく、奉仕の希望を提出する時がやってきました。奉仕を担いたい気持ちにはあれど、それぞれが日々の生活に追われて、理想のようにはいきません。それでも教会が新しくされるこの春、一歩踏み出せることがあるかもしれません。

先月は教会のLAN配線の工事、牧師館の排水柵の工事（トイレの水漏れがありました）、立て看板・掲示板の新調がありました。礼拝堂外階段へと続く扉も老朽化で壊れ、礼拝堂タイルの修繕も必要です。一つひとつ教会を整えながら進んでいきましょう。

新年度、教会学校は「御言葉と出会おう」というテーマで、説教者の愛唱聖句をそれぞれ取り上げていきます。主日礼拝は松谷先生によるヨハネによる福音書の説き明かしが始まります。新しい年度、新しい教会生活にわくわくと同時に、これまでと変わらない気持ちで主と静かに向き合って歩んでいきたいと思えます。

(石室裕一)

牧師の書齋から

春を通り越して初夏!?の気候とは無縁の地下室で暖房を入れて最後の教会総会資料を作成しています。6人の伝道師たちはここでどんな気持ちで一日を過ごしていたのでしょうか。礼拝堂正面右手の小部屋よりはかなりいいとは思いますが、

ば、まだの方もいます。しかし、何の心配もしていません。何年も原稿をお願いしてきた方ですからこちら事情が分かっています。もともと、総会資料の半分近くを占める自分の原稿はまだです。昨年までは、お願いした締切に依頼者が間に合わないのでは申し訳ないと思つて、締切の時点ではほぼ入力でできていました。

各委員会、団体、諸奉仕などの責任者35人に原稿を依頼しました。すべてメールです。依頼した翌日に原稿をくださった方もいれ

る牧師は「神に献げた」ではなく「髪を献げた」と言っていました。松谷牧師も先月まで教会付属幼稚園の仕事が毎日あり、朝晩の通勤はさぞ大変だったことでしょう。柱2本残してリノベーションした牧師館に松谷牧師ご一家が転居し2ヶ月、喜んで生活してください。と安心していたら汚水があふれ出したとのこと。土中にある汚水枡の交換工事となりました。7ヶ月使用していなかったことや、節水型タンクで以前の水量の3分の1と

なったために詰まったのでしようとのこと。一番の原因は目には見えない汚水枡と塩ビ管を、ちゃんと繋いでいなかった以前の工事の問題でした。工事のついでに、積み残していたブロック、石板を撤去してもらいました。最後は外階段の木製扉が外れた件です。以前強風で飛ばされた反対側の扉です。扉と枠を繋ぐ軸が劣化したためです。軸の交換で済むのか丸ごと取替えか、業者に依頼中です。これが「牧師の書齋から」の最後になるとは!! (岸)

個人消息



掲示板



- もより教会受難週合同礼拝
4月17日(木) 午後7:00 千歳船橋教会
- イースター 4月20日(日)

「栄 光」2025年4月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話 : 03-3428-5029 / FAX : 03-3428-5038
牧師 : 松谷祐二
編集 : 栄光編集委員会
Email : kyodon@nifty.com
HP : <http://kyodokita.life.coocan.jp>